通　信

国外派遣研究員としてドイツに滞在して

Stationed in Germany as a researcher on assignment overseas

田原　淳子

Junko TAHARA

1．国外派遣研究への動機

ドイツは、「近代体育の父」と言われたカール・ディーム（Carl Diem）を始め、伝統的に優れた体育・スポーツ研究者を多数排出してきた。特に、オリンピック研究においては定評があり、今日でも多くのドイツの研究者がオリンピックの思想・文化・学術的牽引を行っているといっても過言ではなかろう。

筆者は、これまで、「スポーツと人間形成」、「オリンピズム（オリンピックの理念）」、「オリンピック・ムーブメント（オリンピック運動）」、「日本と国際社会をめぐる近代オリンピック史」、「オリンピックと教育」などについて研究を行ってきた。ドイツと日本は、歴史的にも深い外交関係をもつ。現地に滞在して、現在の主たる研究テーマである「オリンピックと政治」および「オリンピック教育」に関する現地視察を含め、幅広く調査・研究を深化させたいと考えた。

受け入れ先の指導教授を依頼したのは、コブレンツ・ランダオ大学[1)]のオットー・シャンツ（Otto J. Schantz）教授であった。同氏は、世界的に著名なオリンピック研究者の一人であり、近代オリンピックの創始者ピエール・ド・クーベルタンの思想ならびに近代オリンピック史研究の大家である。『IOC百年史』の執筆における功績により、第106次IOC総会（1997年）においてオリンピック・オーダー（勲章）を受賞している。シャンツ氏とは、1991年に国際オリンピック・アカデミーの教育者セッション（ギリシャのオリンピアで開催）で知り合い、その人柄と学識の深さに魅せられた。ちょうど学位論文の準備をしていた時期であり、そのとき同氏の勧めで国際ピエール・ド・クーベルタン委員会（CIPC）に入会した。その

コブレンツの街の歴史を表現した像（下から上へ）

国士舘大学体育学部（Faculty of Physical Education, Kokushikan University）

後は、1998年に日本オリンピック・アカデミー（JOA）が設立20周年記念セッションで同氏を講師に招聘したことで再会し、2006年に筆者がCIPC理事に就任してからは毎年顔を合わせるようになっていた。

長年の希望であった国外派遣研究のための準備を進めていた時期に、2020年オリンピック・パラリンピック競技大会の開催地が東京に決定した。そのときから7年後の大会の成功およびオリンピックが日本や世界に残す有益なレガシー（遺産）への模索が行われる中、オリンピックを政治と教育の面から研究する意義はきわめて大きいと思われた。

2．コブレンツでの研究の方向性

コブレンツは、ライン川とモーゼル川が合流する交通の要所にあり、トリアーに次ぐドイツで2番目に古い街である。人口約11万人のこじんまりした街で、治安もよく、外国人は比較的少ない印象がある。ライン川沿いにあることから、鉄道の便がよく、ボンへ30分、ケルンやマインツには約1時間で移動できる。コブレンツ・ランダオ大学は、コブレンツとランダオにそれぞれキャンパスを有する州立大学である。筆者はそのコブレンツキャンパスにあるスポーツ科学研究所に2014年4月1日から2015年3月31日まで籍を置いた。

現地に到着後、シャンツ教授と当地で進める研究プロジェクトについて協議を行った。そこでは、様々な研究の可能性を視野に入れながらも、内容をより具体化し、焦点化していくために、まず、「1948年ロンドン・オリンピックに対する日独の反応に関する比較研究」をテーマに設定した。1948年ロンドン・オリンピックは、周知のとおり、第二次世界大戦後、最初に開催されたオリンピック大会であり、敗戦国の中で日本とドイツは共に大会に招待されなかった。このことを受けて、両国のメディアやスポーツ関係者、また外交筋がどのような反応を示し、行動を起こしていったのかを検討し、両国が4年後の1952年ヘルシンキ・オリンピックにおいて参加を果たすまでのプロセスを多角的に明らかにしていくことを研究の目的とした。

日独の政治史・経済史等については、国内外において多数の比較研究・文献が刊行されている。しかしながら、スポーツ史における日独比較研究は、未着手といってもよい状況にあり、まして国際政治史等の他分野との関係性において日独のスポーツ事象を捉えるという試みは、皆無に等しい。IOCのトーマス・バッハ会長の言葉を借りるまでもなく、オリンピックの理念（国際平和、人格形成等）の実現のためには、スポーツの力だけでは難しく、最終的には政治の力に委ねなければならない。戦後の混乱期からオリンピック・ムーブメントが再び立ち上がる時期に、政治とスポーツが交錯する事象を日独の比較において研究する試みはきわめて興味深く、意義深いテーマに思われた。

3．史料収集の過程

最初に、コブレンツ・ランダオ大学の図書館において、文献を収集した。次に、事前に検索で下調べをした上で、ケルン・ドイツ体育大学の図書館に数回通って、相当数の文献収集を行った。また、同大学に併設されているカール＆リゼロット・ディーム研究所所長と面会し、同研究所の史料の閲覧・複写を数回に分けて行った。カール・ディームは当時ドイツが不参加ながら、実際に1948年ロンドン大会を視察した人物であり、ディーム自身が残した手記のほか、同氏が収集した当時の新聞記事等を多数入手することができた。

コブレンツには、旧西ドイツ時代から連邦公文書館があり、シャンツ教授の知人である元館長の案内で、同文書館の史料に当たることができた。しかしながら、東西ドイツの統合後、主要史料の多くは、ベルリンの連邦公文書館に移設されてい

連邦公文書館（リヒターフェルデ・ベルリン）

た。一方、在コブレンツの連邦公文書館には、スポーツ関係の注目すべき史料として、1972年ミュンヘン・オリンピックに関する大会組織委員会の史料が保管されていることが確認できた。後日、ベルリンにある連邦公文書館を訪問したが、当館では文献の複写や写真撮影が認められておらず、また時間的な制約もあって、十分な成果を上げることはできなかった。また、ドイツ連邦共和国の成立（1949年）以前の文書類は、ドイツ国内にはあまり存在しないことも明らかになってきた。

２度目のベルリン訪問では、ドイツ外務省の政治文書館を訪問した。同文書館については、事前に同館の司書と入念なやりとりをして関係文書の所在について絞り込みをしていった。しかし、やはり1948年前後を研究対象とするという時代的な制約から、こちらが求める文書の存在を確認することは難しかった。この状況について、シャンツ教授と協議し、この時期の外交文書を入手するには、当時の連合国側（フランス、イギリス）において史料を収集する必要があるとの結論に至った。この点については、調査時期を改めて、継続課題とすることになった。

オリンピック関係の史料については、シャンツ教授が所蔵するIOC議事録のコピー（1894年IOC設立以降1972年まで）を複写し、またマインツに在住するノーベルト・ミュラー（Norbert Müller）教授（カイザーズラウテルン大学教授・元マインツ大学教授）を訪ね、同氏のご厚意により同氏が所蔵する膨大な史料を複写させてもらうことができた。

文献調査を進める中で、1948年ロンドン大会に関するドイツとフランスの新聞報道分析に関する論文がそれぞれドイツとフランスの研究者により発表されていることが明らかになった。日本においては、日本がロンドン大会に招待されなかった理由を究明することを目的とした日本国内の新聞報道分析の研究がすでに確認されている。しかし、これらの内容を精査した結果、それぞれの論文の研究対象や視点にはずれがあり、調査検討された新聞史料も十分とは言えないとの結論に達した。そこでこれらの先行研究を参考にしつつ、より総合的・網羅的な研究の完成を目指すことにした。

ドイツ国内における新聞史料を網羅するために、当初はドルトムントにある新聞研究所において史料収集を行う予定であった。しかし、事前調査において、フランクフルトにあるドイツ国立図書館により多くの史料が所蔵されていることがわかり、収集先を変更した。同国立図書館には、ドイツ国内で発行された地方紙を含む一般紙およびスポーツ紙が多数所蔵されており、それらの閲覧と関係記事の収集を行った。しかし、その頃には帰国の時期が迫り、研究対象とする時期のすべての新聞・雑誌を閲覧するには至らなかった。改めて訪独し、さらに継続して史料の収集にあたる必要がある。

帰国後は、ドイツで収集した史料に相当する日本側の史料を収集しなければならない。日本における1948年ロンドン大会に関する新聞報道やオリンピック関連団体の議事録の分析については、若干の先行研究があるが、研究の視点が一元的であるため、史料の所在の確認と多角的な視点での史料の読み直しが求められる。さらに、国内外の各競技団体の動きにも着目して史料を収集すれば、より重層的な分析が可能になる。例えば、日

本においては、日本水泳連盟が1948年ロンドン大会の日程に合わせて日本選手権大会を開催し、オリンピック大会との記録を競ったというエピソードはよく知られている。

上記研究については、研究協力者を募って2015年度科学研究費補助金の申請をし、採択された。ドイツに滞在しての研究生活が新たな研究の種を生み、推進力を加速させた。

以上のような1948年ロンドン大会とその後のオリンピックと政治に関する研究の他に、ドイツのオリンピック教育についても史料・情報収集を行ったが、その内容については、紙面の都合から稿を改めたい。

４．新しい研究の萌芽

５月に、知人の紹介でフランクフルトの日本国総領事を訪ねた。その際、民間のスポーツ交流が発端となって姉妹都市提携に発展していくケースが多く見られることなどが話題に上り、興味を惹いた。総領事館では、ドイツにおけるスポーツ行政組織の情報に加え、ドイツスポーツ少年団などの民間のスポーツ交流団体、日独協会、日独の姉妹都市リストなどについても情報を得た。それ以後は、スポーツにかかわる外交・政治面のみならず、民間団体の動きなども視野に入れて、研究を進めていくことにした。

その後、ケルンの日本文化研究センターを訪問し、所長・副所長と面談した。同センターでは、主に日独関係に関する研究情報を入手することができた。また、そこからベルリンの日本大使館職員を紹介してもらうことができた。同大使館では、そこで活用されている日独関係に関する主要文献の他、スポーツと国際交流に関する現在の日本外務省の動向（有識者会議等）についても情報を入手することができた。

これらの情報から、上記のオリンピックと政治に関する研究と平行して、民間の日独スポーツ交流についても意識して情報を収集するようにした。そのような折、コブレンツからほど近いボッパルト（Boppard）在住の人と知り合う機会があり、同市と東京都青梅市が友好協会[2)]を設立し、マラソン大会等を通じて両市民の交流を積極的に行っていることを知った。

セミナーの参加者と（ベルリンにて）

５．大学生活など

コブレンツ・ランダオ大学では、夏学期・冬学期を通じてシャンツ教授の授業（スポーツ教育学講義、スポーツ社会学講義、スポーツ心理学講義、スポーツ科学概論講義、スポーツ社会学ゼミ、スポーツ文化論ゼミ）に参加した。ゼミでは、同教授の依頼に応じて、日本の伝統スポーツである相撲に関するミニ講義を２回行った（テーマ「日本における大相撲の葛藤：伝統文化か男女平等か」および「日本の伝統スポーツ：相撲」）。準備の過程は、手持ちの文献やインターネットを駆使して、発表内容をパワーポイントに日本語で作成し、その原稿を独訳し、それをさらにシャンツ教授に校閲してもらうという大変手間暇のかかる作業になった。しかし、労多ければ、その分、学ぶことも多かったといえる。ミニ講義では、ポスターを見て集まった受講生以外の学生の姿もみられ、日本のスポーツ文化への関心の高さが窺えた。相撲制度の仕組みや力士の生活などについて多数の質問が飛び交った。ドイツの若者の中には、日本の漫

画やアニメをきっかけにして日本に関心や憧れを抱いている学生も少なくない。卓球やサッカーの日本人選手の名前を知っている学生もいた。空手や柔道に親しんでいる学生もよく目にした。

日本の学生との大きな違いが感じられたのは、ゼミでの学生の議論が非常に活発なことである。毎週、次回のテーマに関するかなりの量の新聞・雑誌記事や論文が教員から受講生にメールで配信され、学生はそれらを読んでゼミのディスカッションに臨む。こんな授業が展開できたら、面白いだろうと思うような知的刺激に満ちた内容であった。

同大学では、非常勤講師としてケルンからヨアヒム・リュール（Joachim Rühl）博士（元ケルン・ドイツ体育大学教授）がスポーツ史の講義とゼミの授業を担当していた。思わぬところで、学生時代に留学した際にお世話になった先生に再会するという幸運に恵まれた。スポーツ史の講義の内容は古代スポーツ史、ゼミはサッカーのドイツ・ブンデスリーガーの歴史書の講読・発表であった。その夏学期には、ちょうどブラジルでサッカーのワールドカップが開催され、ドイツが優勝したこともあって、時宜を得た教材であった。大学も街も三色旗が旗めき、大賑わいであった。

ドイツの大学では、日本のように部活動はないが、大学がコブレンツの高等教育機関のスポーツ組織[3]と連携して、学生と教職員が受講できる多数の課外プログラムが提供されている。筆者は教職員対象のピラティスのコースを週１回受講し、自分に合った健康づくりの一つとしての手応えを得た。同コースの講師ヴァルブルガ・クライカンプ（Walburga Kreikamp）先生からは、帰国後も継続して実践できるようにとの配慮で、関係図書と映像資料の提供を受けた。

その他、年間を通じて、市民大学に通って週２回ドイツ語講座を受講し、さびついていた語学の習得に努めた。ドイツ語でドイツ語を教わり、ドイツ語で生活しながらドイツ語を身につけていくという方法は、現地ならではの学び方であろう。ヨーロッパでは、高校を卒業すると、一定期間、外国の家庭に住んでベビーシッターなどをしながら語学を学ぶシステムが定着しており、市民大学でもそうした東欧などからの若い女性の姿が多くみられた。

６．ドイツでの生活を終えて

大掛かりな歴史研究には、膨大な文献・史料の収集と検討、緻密な編集作業が必要であるため、単年度で研究成果を出すことは難しい。しかしながら、これまでは、日本においてまとまった時間を割いて史料収集に当たることが容易ではなかったため、この一年間に収集した史料はその数十倍にも及ぶほどである。それにも増して、もっとも意義深かったのは、シャンツ教授と随時行うことができた研究協議と、同氏の惜しみない協力によってこの研究プロジェクトを遂行してきたという事実であり、ドイツの世界レベルの研究者と共同で研究するという基盤を築くことができたことである。この研究は、まだ緒に就いたばかりだが、さらに努力を重ねて、研究の成果を着実に世に出せるようにしていきたい。

外国で生活することは、決して容易なことではない。ひと言でいうと、「楽しく、大変」であった。大変だった方からいうと、日本からの出発の日、フランクフルト空港のストライキのため、搭乗予定の飛行機が欠航になり、成田空港で急遽、トルコ航空に変更されイスタンブール経由で向かった。それ以後も例年にないというドイツの交通ストライキの多発には、たびたびわずらわされた。郵便物の不着、税関での荷物のストップ、スーツケースの紛失、住居にまつわる故障など、トラブルには事欠かなかった。いずれも手間暇をかけて解決することができたが、トラブルに見舞われたときに家主さんや受け入れ教授など、身近にいる現地の人々の協力、サポートは不可欠で、日頃のコミュニケーションや良好な人間関係づくりの大切さを思った。

楽しさの方は、言語や文化、人種などがまったくちがう国の人たちとの心の交流である。ちがうことが前提にあるところで何かに共感したり、新しい発見があったり、相手方の異なる考え方や習慣、やり方を理解したり、自分や日本のそれを伝え理解してもらうことの喜び、共に何かを作り上げていくことの深い楽しさである。こうした体験を通じて、自分がそれまであたりまえ、あるいは普通であると思っていたことが、実はそうではないことに気づく、そうでなくても成り立つということがわかる。視野が多少なりとも広がって、新しいものを自分の中に取り込むことができる。日本とのちがいを知ることで、日本を客観的に見ることができるという利点がある。

一年間のドイツ滞在を通じて、人が生きるというのはどういうことなのかということにも思いが及んだ。最初に立ちはだかるのが言語の高い壁である。わずかな進歩を敏感に感じ取って自らを励まし、自ら考え、動き、学び、練習する、繰り返す。やがて、次のステージが訪れる。答えは意外にシンプルだった。あらゆることに共通しているのではないかと思う。こうした様々な経験を、機会のあるごとに学生や若い研究者らに伝え、橋渡しをしていきたい。

最後に、このたびの国外派遣研究という大変貴重な機会を与えていただき、また多大な支援・協力を賜った国士舘大学および関係者の方々に深く感謝の意を表したい。どうもありがとうございました。

参考

1）コブレンツ・ランダオ大学コブレンツキャンパス https://www.uni-koblenz-landau.de/de/koblenz/
2）青梅・ボッパルト友好協会　http://www.geocities.jp/takesuejp/index-j.htm
3）AHS　http://www.uni-koblenz.de/~ahs/neu/index.php/frontpage